

3 協同性

友だちと一緒にの楽しさを知る3歳児

京都府舞鶴市健康・子ども部幼稚園・保育所課主幹、舞鶴市立舞鶴こども園園長 ●島田久子

1 保育のポイント——それぞれの自己発揮

3歳児は、“自分のことが一番”の年齢です。自分の好きなことや、やりたいことを見つけて、十分に自己発揮することが大事な時期です。そして、好きな遊びを通じて、友だちと一緒に遊ぶことが楽しいと感じることが協同性が育まれる第一歩となります。そのためには、状況を見守りながら時に保育者が遊びの中に入り、一緒に楽しんだり、モデルになったりして子どもの自己発揮を支えることを大切にします。保育者は、一人ひとりの興味や関心をとらえ、発達を見通して援助する必要があります。

2 保育実践の具体

(1) まずは子どもの興味や関心を大切に

園では子どもの興味や関心に基づいて、日々遊びを楽しんでいます。春には、部屋のままごとコーナーで、フライパンやお玉を使って料理したり、まな板や包丁で野菜を切ったりして、「○○は、ママやで」「○○はおとうさんやで」「ごはんできたわよー」などとやり取りしながら、保育者と一緒にままごとを楽しんでいました。また、夏野菜を収穫した後は、クラスのみんなで相談し、ピザづくりも体験しました。すると、子どもたち自身がままごとのコーナーを「ここピザ屋さんやで」とピザ屋にして、「いらっしゃい、



3 協同性

いらっしゃい、ピザはいかがですか」「ピザください」などのやり取りをするようになりました。保育者も、「おもしろそう！ここピザ屋さんにする？」と問いかけると、子どもたちも「するする！」と乗り気になり、ピザ屋さんごっこが始まりました。保育者は、キッチンのでそばにテーブルや椅子を置いたり、壁や窓にメニューが書いてある広告を貼ったりして、ピザ屋のイメージが広がるように環境を整えます。その隣のコーナーには、子どもたちの「○○がいる、○○も作りたい」という思いをかなえるために製作コーナーを設置し、ピザ屋さんに使えそうな素材も準備しました。子どもたちはピザ屋さんごっこをしながら、「ジュースもいるで！」「チョコのピザ作りたい」と、次々と作りたいものを作り始めました。イメージに合う素材がないと「先生、○○作るから、○○なのが欲しい！」と、自分から伝えに来るようになり、時には、家から「これで○○つくるんや」と持ってくるようにもなりました。

保育者は、一緒に製作しながら、切りやすいように紙を押さえるなど、最後は自分が作ったと思えるように手助けしたり、「これは糊で貼れるかな？」とヒントを与えたりして、子ども自身で考えられるようにかかわっています。



保育者にさりげなく手助けしてもらったり、友だちがされているのを見たり、4、5歳児の遊びの姿を見たりすることが、3歳児にとっての協同性のモデルとなっています。

(2) 自分の思いや考えを伝えるお話しタイム

遊びが一段落すると、部屋やそれぞれの遊びの場でサークルになり、友だちがどんな遊びを楽しんでいたかを共



有するお話タイムの時間を設けます。3歳児はそれぞれが好きな遊びを楽しんでいるので、「年長さんのケーキめちゃうちやおいしそうやった」「お金がいるって言ってた」「レジがいるって！ 作りたい！」「お庭にダンゴムシがいっぱいおった」などの楽しかったことやみんなに知らせたいこと、何でも話したいことをみんなの前で話します。全員が発言するのではなく、10分から15分程度の時間をとるようにしています。この時期は、まだ、自分の言いたいことだけ言って友だちの話聞いていないことや集中できないこともあります。そんな時は、「〇〇くんがダンゴムシのお話してるよ」などと、興味をもてるようにさりげなく誘ったり、無理にサークルに入れるのではなく見守ったりしています。

友だちの思いを受け止めたり、他者にわかるように伝えたりすることが難しい時期なので、保育者が言葉を添えたり、分かりやすく言い換えたりもしています。短時間でも、**思いを共有して、3歳児なりに友だちにもそれぞれ、思いがあることを感じ、知るということが大切**です。また、発達や経験の差が大きい時期でもあります。特に、家庭から初めて集団に入った子どもと集団経験のある子どもとの経験の差に配慮して、両方の良さを認めながら集団としての育ちにも配慮した視点が大切です。

(3) みんなで一緒に体験を

本物を肌で感じられるようにとピザ工房に行き、それぞれが気に入った野菜を生地にのせてピザを作ったり、ピザ窯で焼いたりする体験をしました。み

んなで力を合わせて何かをするというより、楽しい体験を共有することで、一緒にするこ



との喜びや心地よさを感じる経験になっています。みんなと一緒に楽しい気持ちになることは協同性の土台として、とても大切なことです。また、みんなで体験したことでピザ屋さんごっこに本物らしさが加わり、「おおきい(窯)火が付いたんで焼いたな」「熱いで手袋してたな」と、窯や道具づくりにも発展しました。共通の体験をしたことで、イメージも共有しています。イメージを共有することも協同性を育む上ではとても大切です。



3 保育のポイントを生かした環境づくり

年齢によって保育者が準備をするものや、援助する範囲は変わりますが、どのクラスも環境を設定した時、子どもがどのように遊ぶかをイメージして準備することを大切にしています。また、実際に設定したあとも、その広さや動線や机などの高さが活動に合っているのか、友だちを意識できる環境になっているかなど、確認して再構成します。ごっこ遊びをしながら必要なものを保育者や友だちと作れるように、さまざまな素材や道具を棚に置き、ごっこ遊びをしている子どもから製作している子どもの姿が見られるように、また、製作している子どもからも遊んでいる子どもが見られるような位置に机も置きます。また、製作する際に椅子が必要か、そうでないかも自分たちで選べるようにしています。どの体勢で作業するのがやりやすいのか、また、道具を必要に応じて自分で選んで使うということも自分で知っていきます。素材には、紙や布、年齢にあったバラエティに富んだ素材を準備します。自分でやりたいという思いや考えを発揮できるように環境を整えます。



3 協同性

自分や友だちへの信頼を育む4歳児

京都府舞鶴市健康・子ども部幼稚園・保育所課主幹、舞鶴市立舞鶴こども園園長●島田久子

1 4歳児の保育のポイント——それぞれの自己認知

4歳児は、“自分のことを知る”年齢です。3歳児で十分に自己発揮して友だちと一緒に楽しく遊んできた経験を土台にし、さらに、自分のことが客観的に見えてくる時期でもあります。友だちの存在を意識するようになり、刺激になって意欲に結びつく半面、自分のできなさを感じたり、友だちの姿が気になったりします。だからこそ、この時期には一人ひとりが自分のやりたいことにじっくり試行錯誤して取り組むことで、自分への信頼をつくっていくことが大切です。自分の良さや友だちの良さに気づき、保育者や友だちと一緒に遊びをすすめる楽しさを感じることで協同性も育まれていきます。そのため保育者は、一人ひとりを認めたり、励ましたりして、それぞれのこだわりを支えることを大切にしています。

2 保育実践の具体

(1) それぞれのこだわりを大切に

I児が作った的当てゲームからお祭りに興味をもったことや保育者が準備したお祭りの写真などがきっかけとなり、盆踊りの櫓や太鼓、浴衣など自分の興味のあるものを作り始めました。R児は、みんなで鑑賞した実際の踊りの場面から浴衣に興味をもち、「どうして作ろかな」と悩んでいました。保育者がイメージしやすいように浴衣の写真のカタログを準備すると、R児はそれを見ながら花びらを作って貼り付けたり、「着た時に下(裾)はちょっと広がってるのにしたい」とオリジ

3 協同性

ナリティーを出したり、「ここ(袖)はもう1つナイロン持ってきて半分に切るわ」と自分のイメージに近づけようとしていました。K児は、太鼓に興味があり、さまざまな大きさの箱をもってきて、自分が丸めた堅い紙の棒やラップの芯で叩いて「音が全然違う。びっくり!」と試したり、「(ゲームの)太鼓の達人は太鼓が斜めになっとる!」と傾斜をつけたりして、何度も作り変えていました。保育者も「どうしたら斜めになるかな」「どうしたら倒れんのかな」と同じ目線に立って考えたり、アドバイスしたりします。K児の太鼓づくりは友だちにも広がり、経験を重ねているK児は、「その箱は柔らかいですぐ壊れるで」「握るところになんか巻いた方がかっこいいで」とアドバイスしていました。保育者は、一人ひとりのこだわりに寄り添ってアドバイスしたり、工夫や試行錯誤する姿を認めたり励ましたりすることを大切にしかかっています。

お祭りごっこは、運動会の中で、みんなで作った櫓の上で一人ひとりがこだわりの詰まった衣装をつけて踊ったり、手作りの太鼓をたたいたりして、自信をもって表現しました。この一人ひとりの自分への満足感や信頼感が、協同性の広がりとなり深まりとなって立ち現れてきます。

(2) 楽しい! 嬉しい! もっとやりたい! を大切に

さらに、お祭りごっこから屋台へと興味が広がり、「こんなお店があったらいいな」「お祭り行ったときこんなお店があった」と、ハンバーガーショップや焼き鳥屋、アイスクリーム屋に剣屋さんなどのいろいろなお店屋さんごっこが始まりました。子どもたちが自分の興味のあるお店で遊んだり、必要な物を作ったり、店の場所も部



屋や廊下のフリースペースの好きな場所を選んだりして、楽しめるようにしました。そんな中で、男の子が中心の剣屋さんは、お客さんが少なく、閑古鳥が鳴いていました。そこへ、ファッションセンス抜群のN児がフリルのついた可愛い剣をつくってお店に置くと、たちまち、今までとは違うお客さんで賑わいました。「Nちゃんが作った剣でお客さんが来たな」「人気やな」と、友だちに認められてうれしそうなN児と、お店が賑わってうれしい男の子たちは、一緒に遊びをすすめる楽しさを感じています。また、N児は、友だちに認められ、自分の良さに気づくことができたことで、自分の思いに自信をもって発言することが増えました。

(3) 友だちと思いや考えを共有するお話タイム

3歳児までは自分の言いたいことが中心だった姿から、4歳児になると友だちにもいろいろな思いがあることがわかってきます。**だれがどんな遊びを楽しんでいたか、どんな工夫をしていたのか、どんな発見があったのかを互いに伝え合う**ようにしています。保育者は、「それ面白いね」「いい考えやね」「どうやってするの?」と共感したり、認めたり、問いかけたりしてかかわり、また子ども同士のかかわりを深めていきます。

それぞれの思いも大事にしながら、「○○ちゃんはどう思ってるかな?」などと相手の思いにも気づけるようにかかわるようにしています。また、意見を言いにくい子どもには「そういえば○○ちゃんも△△作ってたね、あれ見せてくれる?」と話がしやすいようにきっかけをつくり、実物を見せ合ったりして、一人ひとりの子どもの思いや表現などをクラスの中で共有するようにしています。

(4) 自信や意欲につながる体験を

本物のお店屋さんで買い物体験をするため、1人200円とエコバッグをもち商店街の八百屋さんにミカンを買に行きました。自分の分

と3歳児やお兄さん、お姉さんである5歳児の分も合わせて3つ買います。大きくておいしそうに見えるミカンを吟味して買い、届けに行くと、「ありがとう、おいしそう!」「すごいなあ、お買い物自分でしたん?」「今までで一番おいしい!」と言ってもらい、とても誇らしげでした。**みんなで楽しい体験をしたことや、異年齢の友だちに認められたことが自信や意欲につながり、さらに、保育参観での保護者を招いてのお店屋さんごっこにつながりました。「お母さんにお金作って来てもらおう!」「エコバッグもいるな!」と何が必要か考え、店の場所はどこがよいかなどの相談を重ね、当日を迎えました。廊下のかき氷屋さんでは、「お部屋ではハンバーガーショップもありますよ」と、声をかける姿がありました。相手のことを思っておいしそうミカンを選んだり、お店を案内したりする姿には、**他者への思いやりや気遣う気持ちが見られ、遊びや体験の充実や楽しさがこうした気持ちを育てています。****

3 保育のポイントを生かした環境づくり

子どもの思いやこだわりをかなえるため、保育者は、子どもがどんなふうになりたいと思っているのかをよく聞き、イメージがわかりやすいものや素材を準備します。また、他者への関心が高まるこの時期には、つくったものを飾る場所や棚などを整え、見えるようにすると互いの良さを感じたり、新たな工夫や考えが生まれたりします。お話タイムでは、ホワイトボードを準備し、その内容を書いたり、イラストや写真などを貼ったりして、イメージや思いを共有するようにしています。



3 協同性

目的に向かって認め合い支え合う5歳児

京都府舞鶴市健康・子ども部幼稚園・保育所課主幹、舞鶴市立舞鶴こども園園長●島田久子

1 5歳児の保育のポイント—それぞれの主体性を尊重

5歳児は、自分も友だちも主体性を発揮し、“互いを認め合い尊重し合う”ことが大切な時期です。これまでの保育の中で保育者に支えられ、主張もしながら、他者の思いにも気づき、互いに助け合うようになってきます。得意なことや苦手なことも認め合い、支え合って目的に向かって協力する協同性の姿として明確に立ち現れてきます。そして、友だちとの遊びや体験を通して充実感や達成感を味わうようになります。保育者は、それぞれの主体性を尊重し、必要に応じてかわるようにならせます。

2 保育実践の具体

(1) それぞれの主体性を発揮する話し合いを！

5歳児の協同性を育むポイントの1つとして、子ども同士で相談する機会をもてるようにしています。リレーごっこでは、子どもたちでグループを決めると保育者が「どうしたらみんなかっこよくリレーできるか相談してみてね」と声をかけ、それぞれのグループで作戦会議が始まります。「どの順番にする？」「バトンが大事だから、バトン渡しの練習しとこ」などの意見が交わされています。保育者は、子ども同士で話し合いがしやすいよう



3 協同性

にホワイトボードと名札を準備し、走る順番に名札を貼っていくという方法を取っています。アンカーの希望が複数になった時には、こんな話し合いもしています。A児が、「1回アンカーしたことあるから、Aは5番にするわ。Cちゃんしたことないもん」と譲りますが、もう1人のB児は「いやや、アンカーしたい」と譲りません。なかなか進捗が見られない中、D児が「このままではずっとできんで。じゃんけんしたら？」と提案し、なんとか順番が決まりました。リレーが終わった後、保育者は、「赤チームはなかなか順番が決まらなかったね。でも今までのことも思い出して、相談して順番を決められていたね」「白チームは応援を最後まで頑張っていたね」と、チームとして望ましかった姿を共有していました。勝った負けた、できたできなかっただけではなく、さまざまな視点で保育者が認めたり、価値観を知らせたりすることは、協同性を育てていく上でとても大切です。

(2) 認め合い支え合う経験を

栽培していたひまわりの種を収穫し、「いっぱいや！何個あるんやろ」「数えてみたい！」と数えています。発達に個人差がある中で、数の認識や理解が難しい子どももいます。保育者は、それぞれで数を数えるのではなく、ペアを組み、野菜の収穫の時よくしていた10個の数のかたまりをつくって数える方法などを提案します。R児は、ペアのK児が、どうすれば10をわかりやすく数えることができるかを考えて提案しています。「僕が先に置くで、K君は僕の後に置いてな。えーか？」と声をかけ、R児がリードして数を数え、交互に種を置いていくという方法を取りました。K児は、自分も10の数を数えることができ喜びにあふれた表情で「もう1回しよ！」と何度もR児と10の数を数えることを楽しんでいました。自分の力にも自信をもち、一緒に生活してきた中で友だちのことも考えられるようになります。互いに認め合い、支え合う協同性の姿と言えます。



(3) 力を合わせて遊ぶ経験を

春から続いているマリオごっこ遊びでは、運動会にマリオの探検を「おうちの人に見せたい」という思いで、小道具や、アイテムを相談して作っています。役割分担についても自然に行われ、切り込みを入れている友だちのナイロンを押しえたり、絵を描いている子どもの柄を俯瞰的に見て、「もうちょっと下の方に描いた方がいいんとちがう？」と声かけたりしています。また、大きな土管を作ったり、迷路を考えたり、さまざまなアイデアが出され、「土管は最後のゴールにしよう」「玉入れは離れて投げた方が面白そう！」「途中でどの仕掛けを置く？」などのコースづくりも相談していました。コースをみんなで周り、鉄棒の回り方や梯子の渡り方など、それぞれのやり方でクリアしていき、「そんなやり方もあるんや！」「私と違うけど、面白いな！」と振り返り、さらに運動会にやりたいという気持ちが強くなりました。



このように保育者は、子ども同士で相談したことを認めて実現できるように支えたり、子ども同士をつなぐように「それ作るの得意な人おってなかったっけ？」などと言葉をかけたりします。

(4) 目標に向かって協同していくためのお話タイム

5歳児のお話タイムは、子ども同士のやり取りが盛んになってきます。友だちの意見に耳を傾け、「それいいな」「俺もそう思った」など友達の意見を認めたり、同意したり、「私は、そっちじゃないほうがいいと思う」「もっとこうしたらうまくいくと思う」など、相手の意見を聞いて自分で感じたことを話したりします。友だちが作った面白い仕掛けや工夫したものをを見せてくれたら、「なんでそこが回るん？」「どの色混ぜたらそうなるの？」と質問しています。保育者は、子どもに任せながら、必要に応じてそれぞれの思いがみんなに伝わっているかを確認するようにします。お話タイムが楽しい時間になるように、

目的に向かって協同する気持ちがさらに深まるように支えています。

(5) より本物のイメージが深まる体験を

ケーキづくりごっこでは、近くのケーキ屋さんに行き、どんなケーキがあるのか見てきました。「おいしそうやし、きれいやな！」とその美しさに見惚れている子どもたちでした。保育者は、より本物らしくケーキづくりを楽しめるように、子どもと一緒に紙粘土とボンドを水で溶いて絞り袋に入れて、より本物らしいクリームでつくるようにしました。

その後、子どもたちは粘度を確かめながら白いクリームをつくり、赤や、青、茶色の絵具を混ぜて、違う色のクリームづくりを楽しみ、ケーキづくりがより豊かになっていきました。さらに、本物のパテシェにケーキをつくってもらったり、子どもが本物のケーキをつくったりして、**体験を重ねることで充実感や達成感が得られます。**

**3 保育のポイントを生かした環境・教材づくり**

5歳児になると遊びながら保育者とともに、自ら遊びやすい場所や動線などを考えて、場づくりをしていきます。室内でケーキ屋さんごっこをしていて、商品が増え、店の場所が狭くなり、お客さんが選びにくく、やり取りがしづらいことに気づきます。保育者は、その様子を見てお話タイムでみんなに意見を聞こうと提案します。すると、「部屋でケーキつくって、テラスで売ったら、お庭からでもお買い物できるし」と意見が出て、「それはいい考えやね！」と保育者と子どもと一緒にテラスにお店を作りました。保育者は、タイミングよく子どもが気づけるように、お話タイムで取り上げたり、遊びの途中でどんなものが必要か考えたりして、準備することを大切にします。

